

キリストの体として互いに豊かに生きる

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出村, みや子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24788

キリストの体として互いに豊かに生きる

総合人文学科長 出村 みや子

コリントの信徒への手紙一 第二二章一二―二六節

12 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。13 つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。14 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。15 足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。16 耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。17 もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。18 そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたので

す。¹⁹すべてが一つの部分になつてしまつたら、どこに体というものがあるでしょう。²⁰だから、多くの部分があつても、一つの体なのです。²¹目が手に向かつて「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かつて、「お前は要らない」とも言えません。²²それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分がかえつて必要なのです。²³わたしたちは、体の中でほかよりも格好が悪いと思われる部分を覆つて、もつと格好よくしようとし、見苦しい部分をもつと見栄えよくしようとします。²⁴見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいつそう引き立たせて、体を組み立てられました。²⁵それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合つています。²⁶一つの部分が苦しまれば、すべての部分が共に苦しむ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ばれるのです。

キリスト教は神に対する愛と共に隣人への愛を大切にしており、東北学院大学は「イエス・キリストに倣う隣人への愛の精神を養う」教育を建学の精神としてきました。皆さんは日常生活のさまざまな局面で、家族や学校、サークル活動に所属し、将来は職場や地域社会などの複数の集

団グループに帰属することになります。現代人の悩みの多くは人間関係によると言われますが、グループ内の対立やいじめ、仲間外れといった問題に悩んだことのある学生も少なくないと思います。大学生活は皆さんが今後社会で活躍する前段階ですから、そうした対立や不和を超えてグループをまとめ、良い人間関係を築くための努力をすることは、皆さんの今後の人生にとって貴重な経験となるにちがいません。そうした意味で本口選びました聖書の箇所は、使徒パウロがコリントの教会に宛てた手紙の中の一節です。パウロは設立間もないコリントの教会内部に人間的思いによる対立が生じたことに心を痛め、この手紙を送りました。ですからこの箇所から私たちは、共同体の一員として生きる上で有益なメッセージを読み取ることができるでしょう。

一二節でパウロはまず、「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である」と述べています。そしてキリストの体としての教会共同体を有機的にイメージするならば、そこには民族的差別も、身分的差別もありません。皆さんが世界史で学ばれたように、キリスト教が広まった古代地中海世界は奴隸制を基盤とした身分社会であり、社会的地位や階層による差別が人々の生活を縛っていました。なぜ当時の古代の身分制社会の中でパウロがこのような革新的なメッセージを大胆に主張できたのでしょうか。パウロはその根拠を二三節で、洗礼を受けた者たちはキリストにおい

て一つの体となり、キリストにおいて皆平等となるからだと述べています。なぜなら体は様々な機能を持つ多くの部分から成りますが、体としての統一性を保っているように、キリストを信じる者の共同体においては、それぞれ目に見える違いはありながらも、キリストにおいてそうした多様性を互いに尊重し合うことが出来るようにされたからです。

次にパウロが、キリストの体である教会共同体においては、ごく一部の人々の働きだけが重要視されるのではなく、互いに異なる多くの部分がそれぞれに、他には置き換えることが出来ない固有の存在意義を持つていと述べていることも重要です。四節をご覧ください。パウロは「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、『私は手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、『わたしは目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか」と述べ、そして一七節以下で「もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか」と非常に興味深い議論を展開しています。パウロは、こうした身体機能の一つ一つにその固有の役割を与えているのが創造主なる神の業であることを人々に伝えており、いわば身体の一つ一つの機能には優劣はなく、そのいづれが欠けてもうまく働くことができないように、キリストの体としての教会を構成する一人一人に神からそのかけがえのない役割や使命が与えられ

ていることを示しているのです。

学生の皆さんがリーダーとしてグループをまとめ、結束させようとする際にぜひ思い起こしていただきたいのが、二二節以下のパウロの言葉です。パウロは、「目が手に向かつて『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かつて『お前たちは要らない』とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです」と述べています。私たちは、目が痛くなれば目薬を使ったり、眼科に行ったりして目をいたわります。日頃は意識しませんが、目がうまく機能しない時になって初めて、目が日常生活においてどんなに大切であるかに気付かされますし、足に怪我をしたときになって初めて足の大切さに気付くものです。そのように、もし私たちが様々な集団のなかで、弱く見える人に対して、「あなたは要りません」などと冷たい言葉を発するのではなく、むしろ暖かだと思いやりで満ちた言葉を隣人に投げかけるように心がけるならば、そうした人が一人でもいるグループの雰囲気は格段によくなることでしょう。二四節以下でパウロは、「神は、見劣りする部分をいつそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」と述べて、キリストにある共同体のあるべき姿を描いています。成立当初の小さな教会は、そのような相互

の思いやりと愛に満ちていたことでしょう。

ところで、皆さんはオーストリア出身のユダヤ人心理学者のアルフレッド・アドラーを御存じでしょうか。アドラーが『人生の意味の心理学』という書物の第一章で述べている「共同体感覚」という概念は、パウロが教会共同体をキリストの体としてイメージしていることにつながっているように思いますので、ご紹介したいと思います。

「われわれのまわりには他者がいる。そしてわれわれは他者と結びついて生きている。人間は、個人としては弱く限界があるので、一人では自分の目標を達成することはできない。もしも一人で生き、問題に一人で対処しようとすれば、滅びてしまうだろう。自分自身の生を続けることもできないし、人類の生も続けることはできないだろう。そこで、人は、弱さ、欠点、限界のために、いつも他者と結びついているのである。自分自身の幸福と人類の幸福のために最も貢献するのは共同体感覚である」。

アドラーは自己中心的な現代人の幸福のためには共同体感覚を取り戻すことが必要であると述べていますが、その際の共同体とは、家族や学校、会社等の身近な目に見える現実社会だけではなくありません。アドラーは共同体を、「さしあたって自分が所属する家族、学校、職場、社会、国家、人類というすべてであり、過去、現在、未来のすべての人類、更には生きているものも、生きて

いないものも含めた、この宇宙全体を指している」と定義しています。こうした共同体の理解は、時と空間を越えた宇宙論的広がりを持つパウロの「キリストの体」のイメージとつながっています。

東北学院は今年創立一三〇周年を迎えますが、東北学院が歴史の流れを越えて目指してきたものは何かを考える時に、パウロの言葉が皆さんの今後の人生の歩みを照らす光となることを願っています。